

原発性糸球体腎炎を原疾患とした尿毒症3例に、本法を導入し、好ましい治療効果を得たので報告する。CAPDは慢性腎不全治療の一翼を担い得るものと期待される。

6. 後腹膜原発の hemangiopericytoma の1例

石井信行, 栗田純夫, 高良健司
佐藤重明 (鹿島労災)
吉田雅博, 院逸功, 尾崎正彦
久賀克也 (同外科)
岩瀬裕郷 (同・病理)

我々は、肝外発育性肝細胞癌との鑑別診断が困難であった画像診断上肝と連続した後腹膜原発の hemangiopericytoma の一例を経験したので報告した。

7. 脳幹障害例における神経生理学的診断法の評価

栃木捷一郎 (都立豊島)
中野 義登 (国立千葉東)

CT 所見のみでは容易に診断し難い脳幹障害例について脳幹誘発筋電図である BR と脳幹誘発脳波である BAER とによる神経生理学的補助診断法を用い、それらの有用性を評価した。その結果62.5%以上の診断率を認めた。

8. 結核性心膜炎で発病し後に粟粒結核と心筋病変を併発した1例

鈴木 光 (都立府中)

22歳, 男, 結核性心膜炎で発病, ステロイド使用後粟粒結核を併発した。心膜炎は発病3か月後には、肥厚のため虚脱し難くなっていた。化療開始約2か月後には、心嚢の結核菌は塗抹陽性、培養陰性になっていた。心嚢空気造影法 (pneumopericardium) が病態診断上有用であり、鮮鋭な画像と、心膜炎の力学的知見がえられた。本例は心筋病変を併い、心膜剥皮術後も心不全症状が持続した。

9. CA19-9 が異常高値を示した胆石症の1例

田中文華, 中山隆雅, 唐木章夫
篠塚正登, 周 妙珍, 多留通矩
古木 新, 相磯敬明 (県立佐原)

症例は、61歳男性。黄疸、発熱、右季肋部痛を主訴に入院した。入院時、胆道系酵素の上昇、高ビリルビン血症、白血球増加と共に CA19-9 が一万以上の高値を示した。胆嚢胆石と総胆管末端部までの胆管拡張が認められ、その後痛みの軽減と共に胆管拡張がとれ CA19-9 を含めた血液検査所見も総て正常化した。今回、総胆管

末端部への胆嵌頓により CA19-9 が一万以上の高値を示したが、腸管への排石により CA19-9 が正常化した一例を報告した。

10. 興和ある経過を示した胆石症の1例

小沢陽一, 関 秀一, 豊田明宏 (山武郡南)

62歳女性。10年前から数年前まで、右上腹部の不快感がときおり出現し、胆石症と診断されたが特に治療を要するほどでなかった。59年8月より無症状の黄疸が出現し増強したため59年10月当院を紹介され入院。PTCにて胆管-胆嚢-結腸瘻を認め、総肝管に胆石らしき陰影を認めた。無治療にて黄疸は消失したため、そのまま経過観察とした。60年3月、発熱と黄疸が出現し再受診し、超音波にて、多発性肝膿瘍を認めた。超音波下に経皮的膿瘍ドレナージを施行し、併せて胆管を造影したところ総胆管末端部に直径2cmの胆石を発見した。5月1日内視鏡的乳頭切開術を施行し4日、便中に排石を認めた。4か月経過した現在症状の発現をみない。本例は Mirizzi 症候群、胆嚢-結腸瘻、肝膿瘍、胆管胆石等胆石症と関連した多彩な病態を示した。しかも全経過を通じ、内科的に治癒せしめえたことは、胆石症の治療を考える上で示唆に富む症例といえよう。

11. 内視鏡的治療により排石しえた肝内胆石症の1例

仁平 武, 古瀬純司, 多田 稔
梶川 工, 守田政彦, 高相豊太郎
(清水厚生)
谷口徹志, 山本 宏, 原 壮
(同・外科)

当院過去4年間の肝内胆石は10例で、1例内視鏡的手技で完全排石しえた。症例は56歳女性、数度の腹部手術歴あり。昭和59年8月上腹部痛、発熱、黄疸出現し当院入院となった。超音波、CTで総胆管及び左肝内胆管に胆石がみとめられた。肝硬変・糖尿病・気管支喘息が併存していた。手術危険性大のため経皮経肝胆道鏡的截石術を行い総胆管胆石と肝内胆石の一部を排石し、次に内視鏡的乳頭切開術下截石術を行い完全排石しえた。患者は現在肝胆道系に関し良好に経過している。

12. 胆石様発作を繰り返した胆管癌の1例

多田 稔, 古瀬純司, 仁平 武
梶川 工, 守田政彦, 高相豊太郎
(清水厚生)

胆石様発作をくり返した胆管癌の一例を報告する。本例は初期に胆石様発作をおこし、その後無黄疸に経過す